

## 【研究ノート】

## タグラグビーの指導に関する現状と課題

—幼児・小学校低学年児童へのタグラグビー導入の効果—

寺 田 泰 人

## Current Status and Issues Regarding Tag Rugby Instruction

—Effect of Introducing Tag Rugby to Infants and Lower Grades of Elementary School—

Yasuto TERADA

## はじめに

昨年9月から11月にかけて開催されたラグビーワールドカップ2019日本大会は日本中に熱狂と感動を与えた。日本代表チームを表す“**One Team**”は2019年の流行語大賞になるなど、まさにラグビー旋風が吹き荒れた。前回2015年のイングランド大会においても日本代表が優勝候補の南アフリカを撃破したことでラグビーブームが起こったが、今回は日本国内での開催、そして何より史上初のベスト8ということもあり、それを上回るラグビー人気となっている(鈴木, 2020)。

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会(以下、日本ラグビー協会と表記する)は2019ラグビーワールドカップ、2020東京オリンピックにおいて、いずれも日本代表チームが出場することで、メディア等でラグビーの露出が増えることを好機に、ラグビーに興味を持ってくれた子どもたちをラグビープレーヤーとしてリクルートすることを目指している。しかし、ラグビーというと誰もが激しいタックルを思い浮かべるように、危険なスポーツというイメージが拭い切れない。そこで同協会普及育成委員会小学生部門では、今まで以上に安全に楽しくラグビーができる環境を整えることを2019ラグビーワールドカップのレガシーの一つとすべく、世界のラグビーの動向や日本のラグビーの現状等を踏まえて、現行の幼児・小学校低学年児童(以下、U8と表記する)に採用される競技規則について、プレーヤーの安全という視点、リクルート(競技者獲得)をする上での視点、長期的プレーヤー育成という視点から見直しを行った。その結果、小学生により安全で楽しいラグビーを提供するものとして、U8の試合にタグラグビーを導入するという競技規則の改定を行った。ただしこの変更により現場で混乱が起こることを想定し、2018年4月から2019年4月までの1年間を移行期間とし、2019年4月からの完全実施を決定した(日本ラグビー協会, 2018)。

## I 問題および目的

日本におけるU8のゲームの現状について、日本ラグビー協会は以下のように捉えている。

- ・コンタクトが認められていることにより、ボール争奪の局面が多くなり、運動量、ボールを触る機会、ボールを持ってランニングする機会などを、すべてのプレーヤーに体感させてあげることが難しい状況が起きている。
- ・コンタクトがあることで、体格が小さいプレーヤーが不利となり、大柄なプレーヤーが活躍する傾向にある。
- ・この年代での体格差は将来続くことではないが、U8の時点で体格差によるコンタクトへの恐怖心等で参加を辞退するような状況を作り出してしまふことは、リクルート（競技者獲得）という点でも得策とは言えない。

以上のような現状を踏まえて、U8のゲームとしてタグラグビーを導入することの利点については、以下のように捉えている。

- ・タグラグビーは、ラグビーの本質的な要素を模していることから、コンタクトのないラグビーによって、安全を確保（脳振盪などのリスクを排除）しながら、コンタクトのあるラグビーへの移行が容易に自信を持って行うことができる。
- ・ボールスキルに重点が置かれており、コンタクトがないという特質が、ランニングスキルとハンドリングスキルの向上を促す。
- ・体格に左右されるコンタクトスキルよりも、ランニングスキルやハンドリングスキルを楽しませることは、U8プレーヤーをラグビーに留める上での助けとなる。
- ・タグラグビーは最低限の能力でプレーでき、プレーヤーの人数、そしてそのプレーヤーのスキルと成熟度のレベルに合わせてゲームをコーディネートすることが容易にできる。
- ・タグラグビーの防御のプレーヤーは、ボールキャリアにタックルする代わりに、相手の腰にあるタグを取るため、追いかけ、かがんでタグをつかむ必要がある。この姿勢はコンタクトのあるラグビーでタックラーがコンタクト直前にとる姿勢と追跡方法によく似ている。

タグラグビーは1990年代の初めに英国で開発され、日本には1996年に持ち込まれている（鈴木，2012）が、当時から身体接触を排除することで危険が少ない取り組みやすいボールゲームであるとの報告がされている（黒川，1999；高山，2004）。またボールを持って走れることからランニングスキルやハンドリングスキルの向上につながるとの報告も数多くされている（紺野，1997；佐藤・鈴木，2008a；佐藤・鈴木，2008b；廣瀬，2010；木内，2020）。

ラグビー協会の決定を受けて、筆者が指導員として携わっているラグビースクールにおいても、2018年12月よりU8の各クラスでは、活動内容をそれまでのミニラグビーからタグラグビーに変更した。ところがスクール指導員の多くは公的な指導者資格を有しているわけではなく、自身のラグビー経験をもとに指導に当たっている。そのため、そもそもタグラグビーを経験したことがなく、その指導方法についてノウハウをほとんど持ち合わせていないのが実情である。そこで愛知県内の他のラグビースクールに対して、U8へのタグラグビー導入の様子を聞き取

りしたところ、実情はどこも同じだった。また早坂ら（2019）が実施した愛知県内2つのラグビースクールの保護者へのアンケート調査の結果によると、U8へのタグラグビー導入について、「賛成」または「どちらかといえば賛成」は19.0%、「どちらともいえない」は45.6%、「反対」または「どちらかといえば反対」は35.4%とU8のタグラグビー移行に関して否定的な意見が多いことが示されている。その理由として技能の向上およびルールへの理解の遅滞があり、U12以上になった際の競技力遅滞への憂慮が推察されることを報告している。さらにU12までのコンタクトプレーの必要性についても42%の保護者が必要と回答している。

日本ラグビー協会は2018年度をタグラグビーへの移行期間として設定しているが、実情としては想定したようには進んでいないことが窺える。そこで本研究では、U8へのタグラグビー導入に対するラグビースクールにおける指導の現状と課題を明らかにすることで、スムーズな移行に向けた方策とタグラグビーの効果的な指導方法を確立することを目的とする。

## II 研究の方法

本研究では、まずは予備調査として、筆者が指導に携わっているラグビースクールの指導員に対して、2019年8月から9月にかけてタグラグビー指導上の課題について聞き取り調査を実施した。その回答の中で主なものとしては、「練習メニューが手探り状態」、「タグラグビー用の教材が欲しい」、「ルールに関する理解不足」などであった。また愛知県内には2019年4月の時点でラグビースクールが13チーム登録している。その交流会を毎年10月または11月に行っているが、そこでの聞き取り調査でも指導方法への理解不足、ルールの認識不足とそれに伴うレフリースの判定に偏りがあることが課題として示された。おそらくこれらの課題は多くのラグビースクールに共通することであると思われる。そこで、2018年5月からの移行期間から2019年度の活動を通して、ラグビースクールにおけるタグラグビー指導に関する現状と課題について、アンケート調査を行った。調査方法の詳細は以下のとおりである。

### 1 調査対象と手続き

2019年2月下旬から3月上旬にかけて、東海地区（愛知県、岐阜県、三重県、静岡県）の28スクールおよび大阪府、広島県それぞれ1スクールの合計30のラグビースクールに対して、郵送（一部インターネット利用）によるアンケート調査を実施した。アンケート用紙はスクール代表者用と個人用（指導員用）の2種類を用意した。

今回の調査では、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴うスポーツ活動の自粛等により、調査を依頼したほとんどのラグビースクールが活動を休止している中だったものの、7つのスクールより回答（代表者用7名、個人用40名）をいただくことができた。内訳は愛知県：1、岐阜県：1、三重県：1、静岡県：2、大阪府：1、広島県：1である。

ただし回収数が少ないこともあり、統計的な処理は行わず、代表者へのアンケート結果と個人（指導員）へのアンケート結果それぞれについて、個別の回答に対して検討を試みた。

## 2 調査内容

代表者用のアンケート項目は、以下のとおりである。

- Q1 U8（幼児～小学校2年生）の活動としてタグラグビーを行っているか  
行っている場合、導入時期はいつか  
行っていない場合、その理由
- Q2 タグラグビーの指導担当はどのようにして決めているか
- Q3 タグラグビーの指導方法についてスクール内で研修を実施しているか  
実施している場合、内容および頻度について
- Q4 U8（幼児～小学校2年生）の練習内容にコンタクトプレーを取り入れているか  
取り入れている場合、その理由と内容

個人用のアンケート項目は、以下のとおりである。

- Q1 タグラグビーの指導方法について資料などを参考にしているか  
参考にしている場合、何を利用しているか
- Q2 日本ラグビーフットボール協会が開催しているタグラグビーティーチャー研修会への参加の有無
- Q3 タグラグビーを子どもたちや保護者はどのように受け止めているか
- Q4 タグラグビーを指導する上で困っていること
- Q5 U8（幼児～小学校2年生）へのタグラグビー導入について率直な感想

## III 研究の結果

### 1 代表者へのアンケート結果より

(1) Q1「U8（幼児～小学校2年生）」の活動としてタグラグビーを行っていますか？」

この問いに対しては7スクール全てでタグラグビーを実施していた。その導入時期については5つのスクールが日本ラグビー協会の通達以前からと回答している。あとの2つのスクールは通達を受けて、やむなく導入したようである。前述のように、タグラグビーは1990年代の初めに英国で開発され、日本には1996年に持ち込まれているので、設立が古く伝統あるいくつかのスクールではかなり以前からタグラグビーを練習に取り入れているようである。特に2005年に「全国小学生タグラグビー選手権大会（通称サントリーカップ）」が開催されるようになってからは、この大会を目指してタグラグビーを活動に取り入れたスクールが急増したようである。実際に回答をいただいたスクールの一つもそのように回答している。しかし同大会は参加資格を小学校4～6年生としているため、今回のU8へのタグラグビー導入とは趣旨が異なるものである。また私が指導員として関わっているスクールでも過去には練習にタグラグビーを取り入れていたが、「タックルが下手になる」、「コンタクトプレーに恐怖心を持つことにつながる」などの理由で定着しなかったという経緯がある。同様の意見は前述のラグビースクール保護者への調査（早坂ら，2019）でも確認されている。

(2) Q2 「ラグビーの指導担当者はどのように決めていますか？」

いずれのスクールにおいてもラグビー限定の担当者を決めているということではなく、スタッフ間の協議によりその年度に割り当てた幼児～2年生の担当者が指導するということが多かった。ただしサントリーカップ大会直前は4年生以上の指導員もルールを覚える程度の研修を行っているというスクールもあった。予備調査でも指摘しているとおり、スクール指導員の多くは自身のラグビー経験をもとに指導に当たっている。そのため、そもそもラグビーを経験したことがなく、その指導方法についてノウハウをほとんど持ち合わせていないのが実情である。しかもラグビー導入決定から2年足らずということではやむを得ない結果と言えよう。

(3) Q3 「ラグビーの指導方法についてスクール内で研修を実施していますか？」

この問いに対しては、4つのスクールが実施しているという回答だった。その内容はスクールとしては、ルールの勉強会を中心に年に1回実施している程度だったが、指導担当者が独自に資料を収集して練習方法を学習しているスクールもあった。後述するが、日本ラグビー協会はここ数年積極的にラグビー指導者研修会を開催しているが、それが十分に周知されていないことも考えられる。

(4) Q4 「U8（幼児～小学校2年生）」の練習内容にコンタクトプレーを取り入れていますか？」

この問いに対しては、2つのスクールが取り入れているという回答だった。その理由としては、ラグビーだけではコンタクトを得意としていた子どもにとっては面白くないからということをおっしゃっていた。内容は相撲、おしくらまんじゅう、タックルバックを使った遊びなど、体の使い方や転び方などに慣れることを目的としたものである。この点については、日本協会も通達（2018）の中で、小学校3年生以降に備え、日頃の練習においてすべてのコンタクト練習を禁止するものではないと謳っており、コンタクトプレーの指導については、昔遊びなどを用いた軽度な身体接触や地面とのコンタクトを楽しみながら実施し、コンタクトプレーの基礎作りを推奨していることに即したものとと言える。

## 2 指導員へのアンケート結果より

(1) 回答者の属性

全て男性で年齢は以下のとおりである。

表1 年齢

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
1人	10人	12人	14人	3人

指導員歴は以下のとおりである。

表2 指導員歴

5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20年以上
16人	10人	6人	6人	2人

指導員自身のラグビー競技歴は以下のとおりである。

表3 ラグビー競技歴

5年未満	5～10年未満	10～15年未満	15～20年未満	20年以上	なし	未回答
12人	4人	3人	4人	10人	3人	4人

(2) Q1「タグラグビーの指導方法について、何か資料などを参考にしていますか？」

この問いに対しては、参考にしているという人が23人、参考にしていない人が17人と、指導に際して資料等を参考にしている人が予想以上に少ない結果となった。タグラグビーが日本に持ち込まれたのが1996年であることから、ほとんどの指導員はタグラグビーの経験はないと考えられる。またスクールにおけるU8の活動も2018年の通達以前はミニラグビーが中心でタグラグビーを積極的に取り入れているスクールはそれほど多くないことを考えるとタグラグビーの指導経験を持つ指導員は少ないはずである。一方、1996年以降体育関係雑誌にて実践報告が散見されるようになってきていること（鈴木、2012）、2008年に改正された小学校学習指導要領解説体育編のボールゲームにタグラグビーが例示されたことにより、タグラグビーは体育の授業で導入されることが多くなったこと、さらに日本ラグビー協会もHPでタグラグビー指導に関する専用ページを開設していることなどから考えると、タグラグビー指導に関する資料は簡単に入手できるわけである。しかし実際に指導に活用しているケースが少ないのは意外だった。なお指導に利用している資料については、表4のとおりだった。

表4 参考にしている資料（複数回答可）

日本ラグビー協会発行のタグラグビーティーチャーテキストやガイドブック	3人
日本ラグビー協会作成のDVD	0人
日本ラグビー協会HP	11人
タグラグビーに関する書籍	8人
YouTubeなどの動画	11人
その他	5人

前述のように、日本ラグビー協会ではHPにタグラグビー専用ページを開設している他、U8へのタグラグビー導入に合わせてテキスト、ガイドブック、DVDなどを作成・発行しているが、実際にラグビースクールではほとんど活用されていないようである。なお「その他」の回答としては、「大阪府ラグビー協会主催の講習会」、「仲間との検討」、「他チームの取り組み」、「日本ラグビー協会実施スタートコーチ講習会資料」、「インターネット」となっている。

(3) Q2「日本協会が開催しているラグビーティーチャー研修会に参加したことはありますか？」

この問いに対しては、ラグビーティーチャー研修会に参加したことがあると回答したのは、わずか3人だった。日本ラグビー協会は2010年度より小学校教員を対象としたラグビー指導法研修会を全都道府県で実施する取り組みを始めており、2013年度からは対象を学校教員だけでなく、社会体育指導員、地域スポーツ指導者にも広げ、年々受講者数は増加している。最近では2017年度（研修会開催：63回、受講者：2,268名）、2018年度（65回、2,994名）、2019年度（66回、3,001名）と積極的に指導者養成を行っている（寺田, 2018；日本ラグビーフットボール協会, 2009-2019）。今回のアンケートでは調査対象が限定的で回収数も少なかったとはいえ、ここでも予想以上に少ない結果であった。

以上、Q1、Q2の結果より、ラグビースクールでラグビーに携わっている指導員は、ラグビー指導に関して十分な情報を得られているとは言い難い。日本ラグビー協会はここ数年積極的に研修会を開催しているが、その周知や受講者が参加しやすい地域、日時などの設定に工夫が必要ではないだろうか。

(4) Q3「ラグビーを子どもたちはどのように受け止めていますか？ また保護者の方たちはいかがですか？」

「子どもたちの声（受け止め方）」として、以下のような回答があげられた。

- ・ラグビーとコンタクトラグビーの2つを経験したことにより、子どもたちの好みは分かれている。（体の大きい子はコンタクト。足が速くステップがうまい子はラグ。）
- ・移行期間のはじめは、接触禁止ということに対してラグビーに戸惑いを感じる子が多かった。2年目になると、ランニング、ステップが面白いという子が増えた。
- ・特に戸惑いも無く、受け入れてくれたと感じています。また、タックルをしなくて良くなったので、試合中痛い思いをしなくても良くなったので、常に楽しく試合をしています。
- ・タックルがあるラグビーとの違いに少し戸惑っているように見える。
- ・低学年に関しては遊び感覚のスポーツであることやルールも簡単であることより、馴染みやすいと思う。
- ・小さいながらもラグビーやタッチラグビーは楽しそうにプレーしています。
- ・ボールゲームとして楽しんでいる子どもたちが多いです。競い合うことが楽しいと思われる。
- ・1・2年生の子どもたちが試合形式で行えるので、とても積極的に参加しています。
- ・私が指導する1・2年生は普段ラグビーを、時々ラグビーを実施しています。その前提で、「今日はラグビー」と伝えると反応は2分される。喜ぶ：ラグを取る行為が楽しい。自分が活躍できる。残念：自分が活躍できない。苦手。コンタクトが無く、つまらない。ラグビーとの違い（コンタクト無し）に戸惑う。
- ・ミニラグビーの方がやりたいという声を上げる子どももいるが、ラグビーを嫌がる子はいない。ラグの練習、試合を実施すれば皆積極的に参加できている。

- ・幼児や新しく入部した低学年の子どもは楽しいと思っています。コンタクトが無いので怖くない。
- ・子どもたちはラグビーのルールを知らない子が多いためかタグラグビーに素直な心で取り組み、ルールにも順応しているように見受けられます。
- ・鬼ごっこの延長のように思っ遊び感覚の子もいれば、スポーツとして捉え、勝ち負けにこだわる子もいます。

子どもたちの受け止め方としては、概ねタグラグビーに好感を持っているようである。特にタックル（コンタクト）がないことで恐怖心を抱かずにプレーを楽しめるということはもちろんだが、ランニングやステップなどボールゲームとしてのスキルを発揮できることに楽しさを感じている子どもがいることは、U8へのタグラグビー導入の趣旨に即したものと言える。一方では移行期間であるため、幼児や1年生の頃にコンタクトのあるミニラグビーを体験している子どもの中で特に体の大きい子どもは、物足りなさを感じているようである。

「保護者の声（受け止め方）」として、以下のような回答があげられた。

- ・体格差を気にせず参加できるため安心感がある。
- ・コンタクトプレーがないので、保護者としては子どもを入れやすいと感じる。
- ・保護者の方々としては、怪我のリスクもなく、安心して応援することもできるし、自らが参加することも可能であるため、歓迎されていると考える。
- ・保護者の方もタックルがないので、安心してみえるようです。
- ・保護者は年齢や体格差に関わらず取り組めることに利点を感じています。またコンタクトが無いことが怪我についての安心感につながっています。
- ・保護者がラグビー経験のある方は物足りなく感じているそうです。未経験の保護者の方は安心して見ていられるそうです。
- ・保護者は年齢や体格差に関わらず取り組めることに利点を感じています。またコンタクトが無いことが怪我についての安心感につながっています。一方でコンタクトのあるラグビーに移行するときの不安は少なからず見受けられます。
- ・保護者も子どもが楽しんでいる姿を見ながら、ラグビーに親しみをもたれているように思う。

保護者の受け止め方としては、やはりタックル（コンタクト）がないことで怪我の心配をしなくて安心して見ていられるということが一番多かった。また「初心者でも、遊びの延長要素が大きく、即日でも試合に参加できるので、溶け込み易い。」「親と子供たちが試合をすることで、親自身もタグを取る難しさがわかると同時に、競技の理解度はあがっている。（特に、お母さんが楽しめるものであり、練習の雰囲気は非常に良いものになっている）」という回答もあった。

- (5) Q4 「タグラグビーを指導する上で困っていることなどありましたら、お聞かせください。」  
この問いに対しては、「プレーの様相に関する課題」、「ミニラグビーへの移行に向けての課

題」、「指導員自身のルールおよびラグビーの理解に関する課題」という3つの要因に関する回答があげられた。

「プレーの様相に関する課題」として、以下のような回答があげられた。

- ・コンタクトラグビーでは、継続率が高く、またボールの動くスピードに緩急があるため、低学年でもプレーの選択にあたって子どもが考える余裕がある。ラグビーは、STOP & GOの連続であり、思考が追いつかない子どもも多く、結果、積極的にボールを持つ子が限定される傾向がある。
  - ・どうしてもパスができない。自分で持って走ってしまう子がほとんど。人数が限られるため、幼児から2年生を分け、対戦する形式を行っているが、経験年数の長い子がほとんどボールを支配し、パスをしないでゴールへ持ち込むパターンが多い。
  - ・まだ小さい子はルールも分からず、ボールについて行くだけ。パスがもらえない、もらおうとしない。
  - ・比較的低学年を担当しています。説明している子どもたちが一番理解しにくいのが、タグを取った側の選手が5m(または3m)下がることです。次にポイントが出来て、パスをすること、またはパスをもらえる位置に移動することが理解しにくいようです。
  - ・トライライン前で、タグを取られた際、双方ともにゴールライン前で、団子状態になることがある。攻撃側がパスをし、大きく逆サイドに攻めるスキルがあればよいが、大抵、子どもたちは前しか見ておらず、意図せず飛び込みトライのような形で顔から突っ込むケースがあり、危険と感ずることがある。
  - ・低学年の指導を行なっています。プレーヤーの集中力がもたないことや理解度を上げるための細かな説明が必要などがあります。
  - ・練習の意味・狙いをわかりやすく説明するには、時間が長くなります。そうすると集中力が切れて、話を聞けなくなるというパターンがある。このバランスが難しい。
  - ・上達するためには楽しいと気持ちよくプレーすることが大切だと考えているので、上手にできたことは褒めて伸ばしていきたい。そのためにも具体的にどの動きが、なぜ素晴らしいのかを本人に伝えるのですが、プレーヤー自身が“何となくこうした”という場面があり、理解せず言われたからやったプレーがたまにあるのが惜しい。
  - ・ラグビーのプレーに慣れていると、コンタクト前提の動き方(突破する、前に立ちはだかる等)になる。
  - ・身体能力の差が出やすい(ラグビーも同様ですが)。
  - ・幼児から小学2年生での理解力に差があり、難しい部分がある。
  - ・低学年に指導するにあたり、細かいポイントを理解してもらおうこと。
  - ・幼児という事もあり、オフサイドの反則がなかなか理解出来ない。
  - ・最後に練習を試合に繋げることが一番難しい。
  - ・ベルトとタグの装着に時間がかかる。正しく装着させるのが大変。
- これらのことはU8であるがゆえに指導が難しいところと言える。そもそも幼児、低学年児

童のため、タグラグビーのルールや戦術をきちんと理解するのは難しい上に、できたとしてもかなりの時間を要する。その上、参加人数が少なく幼児、1年生、2年生が合同で活動する場合、運動能力や理解力に発達差があるため、全体として効果的な練習方法を設定することはかなり困難と言えよう。学年の枠にとらわれず、柔軟な発想で指導にあたることが求められる。またタグラグビー導入でミニラグビーからのプレーの変化として、日本ラグビー協会もボールキャリアがコンタクトを避け、後ろに下がったり、横に流れるという現象が起こることを想定している。しかし、それはあくまでも成長過程のことであり、ラグビーの原則である「前進」の大事さを伝え、ゲーム経験を重ねることで自然とプレーは改善されるものと捉えている。指導者としては、その点を意識して、指導にあたる必要があるだろう。

「ミニラグビーへの移行に向けての課題」として、以下のような回答があげられた。

- ・スピードがでない低学年からタックル・当たりをしていけば、感覚や体の強度も3年生になっても違和感がなく適応できると思うが、3年生ともなれば、体格と併せてスピードも上がっているため、タックルを指導することに子どもの恐怖心がでるのではないかと不安な部分もある。
- ・コンタクトがない分、プレーを構成する要素が少ないので、練習メニューに限られる。
- ・タグは身体を当てないが、ラグビーは身体を当てる必要があり、その違いの理解をさせること。
- ・手先だけのディフェンス。
- ・指導者がラグビー経験者であるが故にラグビーを元に指導することが多い。ラグビーとタグラグビーは別物と考えなければならない。また芝生のグラウンドではノンスパイクシューズは滑って危険ではないか！
- ・低学年には良いと思うが、高学年はラグビーとルールが違うため、混乱してしまう。
- ・ミニラグビーに繋げるための有効な練習メニューの知識に乏しく、メニューのバリエーションが少ない。

これらの意見はU8（タグラグビー）からU12（ミニラグビー）への移行、つまりコンタクトのないラグビーからコンタクトのあるラグビーへの移行についての不安や課題を表したものと言える。しかしこの点に関して日本ラグビー協会は、競技規則の改定によりミニラグビーのコンタクトスキル習得の時期は遅くなるため、小学3年生以降のゲームを改定前と同じようなレベルで実施することは困難であることは想定している。それよりも長期的なスパンでプレイヤーの育成を大切に捉えているため、これまで幼児の年代で行っていたであろう本格的なコンタクトのあるゲームへのステップを、小学3年生からスタートさせるような意識で実施することを指導現場に求めている。加えてU8の活動において日頃の練習ですべてのコンタクト練習を禁止するのではなく、コンタクトプレーの指導については、昔遊びなどを用いた軽度な身体接触や地面とのコンタクトを楽しみながら実施することを推奨している。今回の代表者用のアンケートの回答でも、相撲、おしくらまんじゅう、タックルバックを使った遊びなどを実践し

ている。

「指導員自身のラグビーの理解（ルールも含む）に関する課題」として、以下のような回答があげられた。

- ・ラグビーのレフリングが難しいので勉強したい。
- ・レフリングに関しては曖昧な部分もあるので子どもたちに教える場合も悩むことがあります。
- ・人が少ない。自分のスキル不足。
- ・ルールを覚える必要あり。
- ・通常のラグビーとルールが違うため、戸惑うことがあります。
- ・自身にラグビー競技歴がないため、基本的なプレーやトレーニング方法が十分理解できていない。
- ・子どもたちの指導という観点から考えると、スキル向上という点より個の把握（子ども各々の性格や特性の理解）が必要だと感じます。
- ・指導対象が子ども（特に低学年の場合）だと考えると、指導方法等について保護者の理解、保護者への説明が必要だと感じます。
- ・大まかなルールは日本協会発行の競技規則で確認できるが、細かなルール（例えばペナルティ時のシグナルやオフenseチャージとディフェンスチャージの違いなど）が確認できるツールがないので、そこを日本協会でもマニュアル化していただければありがたいです。

これらの意見はU8へのラグビー導入が移行期間を含めてまだ2年にも満たないことからよるものと捉えられる。Q1、Q2の考察で述べたようにラグビースクール指導員に対するラグビーに関する情報発信や研修機会をさらに充実させていくことが求められる。

(6) Q5「U8（幼児～小学校2年生）へのラグビー導入について、率直な印象をお聞かせください。」

最後の設問として、あらためてU8へのラグビー導入について現場の声を聞いたところ、「賛成」、「反対」、「方向性は理解できるが実態として難しい」という3つの立場からの回答があげられた。

「賛成の立場」から

- ・コンタクトラグビーと比べて怪我のリスクが軽減されるので、コーチとしては安心できます。またコンタクトがない分、初めての子どもでも始めやすい。
- ・コンタクトがないので、危険を感じにくく、幼少期にラグビーを始めるにはハードルが低くなって良いと思う。
- ・ラグビーが危険なスポーツだという先入観を払拭する良い手法、良いスポーツだと思います。
- ・フィジカルでなく、どのスポーツに対しても基本となる動き（走り方・視野を広げる・判断等）に注力して指導できる為。

- ・とても良い事と思います。ラグビーのスキル向上と、体幹訓練に繋がると思います。
- ・ラグビーへの最初の入り口としては、タグラグビーがいいと思う。
- ・ラグビーに取り組みやすい。楽しくできる（鬼ごっこ）。安全である。モールが無く、ボールに集まりすぎないから良い。走るから良い。ぽっちゃり体型の子どもはついていけるのか心配（走りが苦手な子ども）。
- ・タグラグビーの試合の方がプレーの継続回数、時間が多く、全員がプレーに参加する意識を持つようになるのは非常に良い。ATではハンドリング（パス、キャッチ）スキルを向上させるのに有効と感じる。DFではただタグを取ることを良しとしてしまうのではなく、ミニラグビーでのタックルに繋げる指導を行っていく必要がある。
- ・今後、コンタクトラグビーをしていく中で、まず「ラグビーが楽しい」という思いを持ってほしいのでありがたい。
- ・U8へのタグラグビー導入はとても良いと思います。前進する、スペースを見つける、相手をかかわすことを特化して指導できるので、この年齢での運動能力を上げる手助けにもなっていると思います。ラグビーは好きだけどコンタクトが怖いと思うU8以降の子がいます。それが原因で中学生以降はラグビーをやめる子もいます。U8以降もラグビーができる環境が拡大してくれたら良いと個人的には思っています。

賛成意見の方は、コンタクトがないことで安全安心に楽しくプレーできることを第一にあげている。またパスやランニングといったボールゲームスキルが身に付くことの重要性もあげている。これらの意見はまさに日本ラグビー協会がU8にタグラグビーを導入する意義に沿ったものと言える。

#### 「反対の立場」から

- ・あまり賛成ではない。怪我などのリスクはありますが、本来のラグビーが好きになってもらえない可能性がある。
- ・少年団への導入は不要と考えます。
- ・ランニングスキルのある子どもが目立つ。チームプレーがU8では苦手ではないか。指導者がタグの知識を持って指導することが大切であると思うが、それは子どもたちにとって楽しいのか？ 特にランニングスキルの高い子は。個々の能力を高めていくことがU8には大事ではないか。
- ・タグとラグビーは似て非なる競技だと受け止めています。小学生になったら「ラグビー」をしっかり指導した方が後々ラグビーの普及につながると考えています。もちろん安全第一です。小学生時代にタグを経験した子どもたちが中学校以降ラグビーに移行しているのかタグを継続しているのか興味があります。

#### 「方向性は理解できるが実態として難しいのではという立場」から

- ・1年生にはタックル姿勢や当たり方まで教えきれません。（指導時間もないし、本人が理解

できても、実践となると怖さがでてしまうでしょう)。

- ・タグラグビーは確かに楽しいですが3年生に進級する際、ミニラグビーに慣れることが出来るかどうかは心配です。個人的にはU8のタグラグビーは良いと思います。
- ・少し早いと思うところもあるが、にわかでもラグビー人口が増えつつあるので、パス練習やランパスなどでは時間が持たない。とりあえず彼らのやる気、練習に来ること、楽しい事などを養うためには、ゲーム形式もやらないと練習がだらけてしまう。

上記2つの立場の背景には、“ラグビーの本質とは何か”という個人の価値観によるところもあると思うが、競技規則の改定から2年足らずということで、多くのスクールが試行錯誤しながら活動をしている中で、タグラグビーからミニラグビーへの具体的なステップが明らかになっていないことが原因ではないかと考えられる。筆者が日本ラグビー協会の普及育成担当者に聞き取りを行った際、彼はラグビーの本質であるコンタクトプレーの練習を全くしなくて良いのではなく、U8ではまずラグビーの楽しさ(=ボールを持って走ること)を体感して欲しい。その上で練習の内容にコンタクトを入れることはぜひ推奨したい。またタグラグビーへの動機づけとして、全国大会を目指すというチームが少なからずあるが、勝敗にこだわるあまり戦略志向、戦術思考に囚われるのはタグラグビー導入の本来の趣旨からは外れてしまうことを危惧していると語ってくれた。

## おわりに

本研究の結果より、U8へのタグラグビー導入に伴うラグビースクールにおける指導現場の現状と課題について、以下のことが明らかになった。

- ・U8へのタグラグビー導入により、子どもたちは安心してラグビーを楽しんでいる。
- ・U8へのタグラグビー導入は、その安全性から指導員および保護者から肯定的に受け入れられている。
- ・ラグビースクール指導員のタグラグビーへの理解が充分ではなく、指導に際して戸惑っているケースが多く見受けられる。
- ・タグラグビー導入に否定的な意見を持つ指導員は、タグラグビーの導入がプレイヤーの成長を阻害するのではないかという考えを持っている。
- ・ラグビースクール指導員は、タグラグビー指導に関して十分な情報を得られているとは言い難い。日本ラグビー協会はここ数年精力的に研修会を開催しているが、その周知や受講者が参加しやすい地域、日時などの設定に工夫が必要だと思われる。

2008年に小学校学習指導要領にタグラグビーが例示されたことにより、学校の体育授業の中でタグラグビーを取り扱う小学校が増加している。それに伴いタグラグビーを題材とした実践研究も数多く報告されており、教材としてのタグラグビーの有効性が確立しつつある(木内, 2020)。さらに2017年には中学校学習指導要領にもタグラグビーが例示された(2021年4月施

行) ことにより、小学校から高等学校までの12年間を通したラグビーの学習が可能となる。このことは日本ラグビー協会が2019ラグビーワールドカップのレガシーの一つとして、長期的なプレーヤーの育成を目指す意図に大いに関わっている。ただ小学校の体育授業において低学年(1・2年生=U8)のボール運動系の内容は、ボールを宝に見立てた宝運びやタグを使った鬼遊びなどであり、ゴール型ゲームとしてタグラグビーを取り扱うのは3年生以上となる。したがってU8でタグラグビーをプレーする機会は、ラグビースクールの子どもの方が圧倒的に多いことになる。しかし、今回の調査結果により、タグラグビー導入から約2年が経過しているものの、ラグビースクールでは、タグラグビーについての理解や指導体制がしっかり備わっているとは言い難い。また教員は授業研究や研修などを通して、指導法について検討する機会が多いが、地域スポーツ指導者であるスクール指導員は研修会への参加も含めて実施することはなかなか難しい。

今後の研究の課題としては、今回の調査でU8であるがゆえ指導に際しての指導員(コーチ)からの働きかけ(条件設定や言葉がけ)が重要であることが示唆されたことから、あらためて指導現場の声を聞きながら、タグラグビーの効果的な指導方法を確立することを目指したい。

## 引用文献・参考文献

- (1) 鈴木秀人(2020)ラグビーW杯を体育の指導にどう活かすか, 体育科教育68(2), pp. 12-16.
- (2) (公財)日本ラグビーフットボール協会普及育成委員会小学生部門(2018)幼児・小学校低学年(1・2年:U8)児童を対象とした試合へのタグラグビー導入について(解説), [https://rugby-japan.s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/wp-content/uploads/2018/05/U-12\\_mini\\_rugby\\_2018\\_intro\\_re\\_2.pdf](https://rugby-japan.s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/wp-content/uploads/2018/05/U-12_mini_rugby_2018_intro_re_2.pdf) (検索日 2018/5/12)
- (3) 鈴木秀人(2012)派生的ボールゲームとしての「タグラグビー」に関する一考察—ラグビーフットボールとの相違点からの検討—, 体育科教育学研究28(2), pp. 1-14.
- (4) 黒川正紀(1999)タグビーボール—ラグビー型教材の定着を目指して—, 学校体育53(5), pp. 24-27.
- (5) 高山由一(2004)“One for All, All for One”のタグラグビー, 体育科教育52(5), pp. 34-37.
- (6) 紺野健(1997)作戦・戦術を考え競うタグラグビー, 体育科教育45(3), pp. 46-48.
- (7) 佐藤善人・鈴木秀人(2008a)小学校体育におけるタグ・ラグビーに関する一考察—ポートボールとの個人技術をめぐる「やさしさ」の比較を中心に—, 体育科教育学研究24(2), pp. 1-11.
- (8) 佐藤善人・鈴木秀人(2008b)小学校体育授業におけるタグ・ラグビーに関する研究—スローフォワードルールに焦点をあてて—, スポーツ教育学研究 Vol. 28, No. 1, pp. 1-11.
- (9) 鈴木秀人(2009)誰でもできるタグラグビー, 小学館, pp. 25-28.
- (10) 廣瀬勝弘(2010)ボール運動・球技の授業づくり, 教育出版, pp. 11-13.
- (11) 木内誠(2020)タグラグビーの授業のこれまでとこれから, 体育科教育68(2), pp. 18-21.
- (12) 早坂一成・岡本昌也・寺田泰人・高田正義(2019)U8タグラグビーの競技規則の改訂に関する一考察—ラグビースクールでの様相をもとに—, 日本ラグビー学会第12回大会 Supplement, p. 11.
- (13) (公財)日本ラグビーフットボール協会(2005)サントリーカップ第1回全国小学生タグラグビー選手権大会実施要項, <https://www.rugby-japan.jp/news/2005/03/07/6537> (検索日 2020/8/25)

- (14) 鈴木秀人 (2012) 派生的ボールゲームとしての「ラグビー」に関する一考察—ラグビーフットボールとの相違点からの検討—, 体育科教育学研究28(2), pp. 1-14.
- (15) 寺田泰人 (2018) 小学校体育科におけるラグビー指導の課題について—教員免許状更新講習受講者へのアンケート調査から—, 名古屋経済大学教職支援室報第1号, pp. 63-71.
- (16) 文部科学省 (2008a) 小学校学習指導要領, 東洋館出版社, pp. 95-100.
- (17) 文部科学省 (2008b) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社, pp. 51-75.
- (18) (公財) 日本ラグビーフットボール協会 ラグビーオフィシャルウェブサイト, [http://www.tagrugby-japan.jp/?\\_ga=2.172394535.540667354.1600065624-1729305193.1599556094](http://www.tagrugby-japan.jp/?_ga=2.172394535.540667354.1600065624-1729305193.1599556094) (検索日 2020/8/25)
- (19) (公財) 日本ラグビーフットボール協会 2009年度～2019年度事業報告書, <https://www.rugby-japan.jp/jrfu/business> (検索日 2020/9/8)
- (20) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房.

## 謝辞

新型コロナウイルス感染拡大状況下において、ラグビースクールの活動自粛を余儀なくされている最中にアンケート調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 付記

本研究は2019年度桜花学園大学特別研究費の助成を受け実施したものである。

(受理日 2020年9月16日)